

はじめに

本日はガイダンスにお越しいただき、ありがとうございます。

このパンフレットは、
美学芸術学研究室の様々な魅力を
駒場のみなさんにご紹介するために作成しました。
これを読んで「絶対に美芸へ進学するんだ……！」
とまではいかないかもしれませんが、
少しでも当研究室の面白さや、
美学芸術学の学問としての面白さが伝われば幸いです。

■ ■ 美学芸術学とはなにか ■ ■

◆ 美学芸術学 小史

美学芸術学は、18世紀のドイツの哲学者バウムガルテンがそれ以前の理性主体の学問に対し、感性主体の学問を立ち上げようと『美学 (Aesthetica)』という本を著したことに端を発する学問です。その後、カントが更なる批判的な理論構築を行なっています。このため、美学においてカントは避けて通れない存在です。

一方で、芸術に関しては美学の成立以前から盛んに論じられています。古典古代においてプラトンが一連の詩作(芸術)に関する批判的考察を行なったのに始まり、アリストテレスがその論に反駁し、後世の議論の基礎をつくりました。続く古典古代後期の新プラトン学派では、プラトンの芸術論が発展的に語られ、中世のスコラ哲学に影響を与えました。その後、ルネサンスにおいて芸術に対する擁護の機運が高まり、近代における古典古代文芸の本格的再興に結びつきます。近代ではシラー、ヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーの議論が有名です。20世紀になると、芸術論は多様化の一途をたどり、現代へ至ります。

◆ 今日の意義

MP3・「クラシック」ブーム・CM・ライトノベル・ゲーム・文化遺産・環境……どれも、現代においてこそ論じることができ、なおかつ論じる必要性のある美学芸術学上のテーマです。

例えば、著作権なども議論の対象になります。著作権は「ある作品に対して、作者以外の人間が勝手に手を加えてはいけない」という趣旨の法律(=著作権法)によって守られている権利です。しかし、ここで前提とされている「作品」や「作者」という概念は200年程度の歴史しか持っていません。18世紀後半ごろまでは、絵や音楽の作り手は、注文主に振り回され、制作物の内容にまで干渉されることが決して珍しくなかったのです。その後、「天才」である「作者」が、他人が手を加えることができないような「自律的」な「作品」を「創造」という認識が主流となる時代になりました。この認識は現代でもかなり根強いのですが、現代では、「作者」概念などが生まれた当時とは、芸術のあり方そのものがかなり変わってきています。複製技術が発達したことにより、「唯一の、オリジナル」な「作品」よりも複製品のほうが多く出回る事態が常態化しました。また、一瞬だけの作品であるパフォーマンス・アートもよくみられます。ラップ・ミュージックは他の既存の曲などからのサンプリングがかなり重要な要素となっています。

このような作品群に対して、近代的な概念を多く含む著作権を適用するのは果たして適切な態度なのでしょうか。しかし、著作権の在り方について説得力ある主張をするためには、「作者」や「作品」の概念について掘り下げ、現代においてそれらがどう変容してきたのか、あるいはその現状についてよく認識するように努める必要があります。

著作権に限らず、現代においては美や芸術に関する概念はかなり変容していて、それらについて美学芸術学的アプローチを用いて思索することは今日的な意義を十分に持った行為であるといえます。音楽とはどうあるべきか。何が美で何がそうではないといえるのか。そうした問いに答えていくためには、プラトンやアリストテレス、あるいはカント、ヘーゲル、ニーチェなど先人の哲学者たちの美あるいは芸術についての論考を参考にしつつ考察を深めます。これが美学的アプローチだといえます。これらの古典は今日の視点からみれば不十分で批判すべき点もありますが、各時代を代表する思想家の論考は現代においても十分な強度を持っています。

■■ 研究室概要 ■■

◆ 歴史

- 明治 26(1893)年: 東京帝国大学の文科大学(文学部の前身)に美学の講座が設立される
- 明治 43(1910)年: 哲学科の下に美学専修学科ができる
- 大正 6 (1917)年: 美学が美学美術史に改編される
- 昭和 21(1946)年: 美学史学と美学に分離・独立
- 昭和 24(1949)年: 再び美学美術史として統合
- 昭和 25(1950)年: 美学美術史から美学美術史学へ名称変更
- 昭和 38(1963)年: 再び美術史学と美学が分離
- 昭和 42(1967)年: 美学が美学芸術学に改編
- 昭和 43(1968)年: 美術史学が第一類(文化学)から第二類(史学)に移動
- 平成 7 (1995)年: 第一類が思想文化学科に改称
- 平成 28(2016)年: 1 学科制の導入により、人文学科所属に変更

◆ 教員紹介

小田部胤久 教授:

日本・西洋の美学思想担当。非常に厳格かつ本格的な原典研究を行います。

なお、2019年度はサバティカルのため講義は開講されていません。

三浦俊彦 教授:

分析哲学・論理学担当。科学的な美学理論を中心に幅広く研究されています。

吉田寛 准教授:

感性学・デジタルゲーム研究担当。西洋音楽研究もされています。

◆ 専修構成(2019年度)

教授×2、准教授×1、助教×1、教務補佐×6、研究員×5、大学院生×18、事務補佐×1、学部生×58(5年生以上×7、4年生×24、3年生×27):計92名

男女比はおよそ1:1(研究室全体)です。

◆ 雰囲気

教授同士の仲の良さは、宴席だと一目瞭然です。演習や卒論指導では愛のムチをふるわれることもあります。年に数回開催される学生主催のコンパや研究室旅行などには教授も参加され、近い距離感でお話することができます。

学生同士の仲はよく、学問においても日々、切磋琢磨しています。また、面倒見のよい先輩が多く、院生と学部生が二人一組で発表する時などには、先輩の知られざる底力が判明することもあります。

自由な雰囲気と、真摯に学問に取り組む姿勢の絶妙なバランスが築かれています。

◆ 研究室出身の学者・著名人等

谷川渥(美学者。シュールレアリズム研究など)

根岸一美(音楽学者。ブルックナー研究など)

ナム・ジュン・パイク(ビデオ・アーティスト)

中島貞夫(映画監督)

井坂聡(映画監督)

濱口竜介(映画監督)

倉本聡(脚本家)

小林恭二(作家)

渡辺裕(音楽学者。聴覚文化論など)

■■講義紹介■■

◆ 演習(ゼミ形式・必修)

現 3 年生の演習では、毎週テキストが指定され、決められた発表者が中心となって授業を進めます。教官・院生が指揮をとりつつ、課題となったテキストについて、テキストの吟味や、さらに発展させた内容についての議論が行なわれます。扱うテキストは美学・芸術学関連のものが中心ですが、専門的な知識が深まるだけでなく、テキストを理解し議論をする力が鍛えられます。これらのテキストの中には現代の問題に深くかかわる先人たちの思想が盛り込まれており、現代の事象を美学的視点でとらえる訓練になります。

◆ 原典講読(ゼミ形式・必修)

基本的には外国語文献(英語・ドイツ語・フランス語)を講読する授業です。学期ごとに 3~4 講座開講され、毎学期 1 コマ以上履修することが推奨されています。駒場で履修した第二外国語のみにとどまらず、すべての授業が履修可能です。ひとつの文章をじっくりと精読する授業もあれば、数多くの文章を手際よく読むことが求められる授業もあります。授業によっては、テキストに関連した日本語論文を参照する場合があります。

この授業には、進学が内定した 2 年生から院生まで幅広い学年が参加します。授業中に院生の方々の鋭い議論が聞けるのも魅力です。

◆ その他選択科目(美学芸術学概論・美学芸術学特殊講義など)

基本的に、文学部の授業は前期教養における総合科目の A 系列に近いです。

美学芸術学概論や美学芸術学特殊講義は最低取得単位数が定められていますが、他の学部・学科の授業も基本的には自由に履修することができます。ゼミ形式の授業も多くあり、先生がたもご自身の専門分野を中心に講義をされるので、興味に応じて好きなだけ学びを深められるのが本郷キャンパスの良さであると言えるでしょう。

■■ 卒業生の進路 ■■

◆ 就職

美学芸術学は、毎年、就職志望の多くの学生が希望の職種に就職しています。近年の就職先のうち、特にメディア関連(出版・テレビ・IT など)企業は学科で学んだことを直接活かしやすいところだと言えます。また、他の業界でも、学科で学んだ分析・探究の方法・姿勢は仕事において役立つと思います。

近年の就職先 一覧

NHK・電通・博報堂・朝日新聞社・中国新聞社・講談社
 新国立劇場運営財団・和田画廊・音楽座 (Rカンパニー)・NHK エンタープライズ・大映
 テレビ株式会社・葵プロモーション
 富士通株式会社 (システムエンジニア)・シスコシステムズ・NTT コミュニケーションズ・
 日本コンピューター株式会社・株式会社サイバーコミュニケーションズ・チームラボ株式
 会社@本郷・面白法人カヤック
 みずほ銀行・野村証券・アクセンチュア・富士火災海上保険・東京保険医協会・大和証券
 ビジネスセンター
 JRA・JFE スチール・東芝・中日本高速道路株式会社・丸紅
 文部科学省・東京都庁

◆ 大学院進学

例年東大大学院へ 3~4 人程度です。美学芸術学研究室に残る人も多いですが、駒場の総合文化研究科や、大学院しかない本郷の文化資源学科などに進む人もいます。

また、東京芸術大学など、他の大学院に進学する人も若干名います。

■■ 卒業論文 ■■

卒業論文は書くことが義務付けられており、字数は 40000 字程度です。

2018 年度の卒業論文のタイトルは以下の通りです。

- ・夏目漱石における登場人物の「道化」的あり方——『坊っちゃん』を中心に
- ・過去に関する感性の研究——ノスタルジー概念の再検討を中心に——
- ・クラブカルチャー:異なるダンスとその要因
- ・おしゃれ概念の変遷 1950・60 年代における意味の広がり、周辺概念との関係
- ・トマス・アキナスにおける美——靈的／時間的美をめぐって——
- ・記憶芸術についての一詩論——アスマンの記憶論からみた「Don't Follow the Wind」展の研究
- ・レメシアナのニケタス『聖歌の有用性について』——訳と注解
- ・日本のポピュラー音楽における「都会的」という感性「シティ・ポップ」の分析を中心に
- ・デイヴィッド・ホックニー再評価——経験としての鑑賞において——
- ・ロロ「いつ高シリーズ」における「不在」と「まなざし」について
- ・日本人の電柱・電線を見る感性
- ・衣装から読み解く「アンジュルム」
- ・「トポス・シンセシス」と「解釈的フィクション」～レム・コールハースの住宅建築における創造プロセス～
- ・映画『アデル、ブルーは熱い色』の多角的研究 レズビアン表象とメディア比較を中心に
- ・怪獣映画における日米表象の変化——ゴジラとキングコングを手がかりに
- ・『ひまわり』に見る中原淳一の少女像とメディア創造
- ・観光客が捉える金沢市の景観の変遷——明治以降の兼六園周辺を中心に——
- ・「地域型芸術祭」の批評の可能性について——「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」を事例として——

「美学的なアプローチがなされていれば対象は不問」であり、テーマ設定の自由度はかなり高いです。卒論のタイトルからも、美学・芸術学科の学問領域の広さが分かります。なお、他の年次の卒論のタイトル一覧は学科のサイトから見るができます。(http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/thesis.html)

■■年間スケジュール■■

- | | |
|-----|------------------|
| 4月 | 新3年生歓迎コンパ |
| 6月 | 学科旅行（1泊2日） |
| 7月 | （科目によっては繰り上げテスト） |
| 8月 | 夏休み |
| 9月 | 冬学期開始・内定者歓迎コンパ |
| 11月 | ホームカミングデー |
| 12月 | 集中講義 |
| 1月 | 卒論提出・院試 |
| 3月 | 卒業生追い出しコンパ |

6月には、3年生から院生、そして教授全員で1泊2日の学科旅行に出かけます。2018年の行き先は千葉でした。この旅行での飲み会は、お酒の力も借りつつ、教授や院生と一気に仲良くなることができます。

■■時間割サンプル■■

ここでは学科学生の時間割を紹介します。本郷では学部ごとに授業の開始時間が異なることがあるため、他学部の授業を履修する場合は注意が必要です。また、文学部生も駒場で開講される後期教養学部の授業を履修することができますが、キャンパス間の移動に1時間程度要します。2・3 限間でのキャンパス移動は不可能ではありませんが、慌ただしい移動になるでしょう。表中の赤字のコマは、美学芸術学専修の授業にあたります。

Case 1: 進学予定／関心分野は西洋音楽

3年 夏学期

	月	火	水	木	金
2			比較文化論(駒) 西洋音楽分析 (教養・ゴチェフスキ)	院・聴講 (渡辺裕)	美学演習 (小田部胤久)
3		原典講読(独) 判断力批判講読 (小田部胤久)			美学特殊講義 ハルヒと人間原理 (三浦俊彦)
4	芸術学概論 (渡辺裕) <small>* 渡辺先生は18年度で退職</small>	英文特殊講義 シェイクスピア歴史劇分析 (英文・大橋洋一)	音響芸術論(駒) ポピュラー音楽 (教養・毛利嘉孝)		独文演習 カフカ講読 (独文・大宮勤一郎)
5			教養前期・聴講 (教養・ゴチェフスキ)		

※このほかに、集中講義「**美学特殊講義**(バロックオペラ、大愛崇晴先生)」を受講。

【本人のコメント】

文学部は卒業に必要な単位数があまり厳しくないため、上記のようなコマ数で4年生までに8割がた取りきれます。音楽と文学にしか関心がないのがばれてしまうような時間割ですが、このように興味のある分野を集中的に履修できるのは魅力的です。水曜日は1日駒場で教養学部の授業を受けました。教養でも、おもに比較文化や表象などで、美学と関心の近い授業が開講されているため、美学の多くの学生が駒場にも顔を出しています。また、大学院の授業については、先生の許可があれば聴講することは可能ですが、正規履修はできないため、単位を取得することはできません。

Case 2: 学芸員資格取得予定／文学、史学など「物語」に関心

2年 冬学期

	月	火	水	木	金
2		言語態理論(駒) フィクション論 (教養・郷原佳以)			比較芸術(駒) 西洋近現代絵画 (教養・三浦篤)
3	社会教育論(駒) (教育・李正連)		美学特殊講義 メタ芸術の諸相 (三浦俊彦)	メディア文化論(駒) (情報学環・石田英敬)	日本語文化論(駒) 漱石『それから』 (教養・小森陽一)
4	社会教育論(駒) (教育・李正連)				日本文化論(駒) 能 翁論 (教養・松岡心平)
5	国文学概論(駒) 近代小説 (国文・安藤宏)			ボーカロイド音楽論(駒) (全学自由ゼミナール) (教養・鮎川ぽて)	

※月3・4「社会教育論」はA1のみ。

【本人のコメント①】

水曜のみ本郷、他の曜日は駒場で組みました。時間割に余裕のあるこの時期は、本郷・駒場、持ち出し科目・前期教養科目の別を問わず、様々な講義を取ることができるのが楽しいところだと思います。文学と美術で迷い、間を取って美芸に進学したという経緯もあって、入り混じった時間割です。折角なので教養学部のゼミ形式の講義を2コマ履修し(火2、木3)、コマ数は抑えめにしました。各分野の概論は駒場で開講されることもあります(月5)。とはいえ美芸の授業をほとんど履修していなかったのは勿体なかったように思いますし、講読の授業ではセメスターを跨いで同じテキストを扱うこともあるので、覗いてみることをおすすめします。

ちなみに教養学部の授業は、火2、金1、金4を前期、木2、金3を後期の持ち出し科目として履修しています(※同じ先生の同内容の授業でも年によって区分が異なることはあります)。学芸員資格認定科目は駒場で開講されていた月3・4の社会教育論のみです。

3年 冬学期

	月	火	水	木	金
2			博物館展示論 (文資・木下直之)	西洋史学特殊講義 大戦期ドイツ社会 (西洋史・森宜人)	美学演習 (三浦俊彦)
3	美術史学特殊講義 戦後西洋美術 (美術史・田中正之)		美術史学特殊講義 19C 仏アカデミズム絵画 (教養・三浦篤)	中国思想特殊講義 近代西洋への影響 (中国思想・井川義次)	美学概論 判断力批判講読 (小田部胤久)
4	原典購読(英) 歴史映画 (渡辺裕)	英文特殊講義 後期シェイクスピア (英文・大橋洋一)			
5					

【本人のコメント②】

近代、特に19世紀末から第二次大戦後が好きだということに気付いてきた時期に、運よく美術史で近代西洋美術を扱う講義が2つも開講されていたので、全体的に近代っぽい授業で固めました。このように、分野だけでなく、年代や地域といった軸で履修を広げることができるのも、文学部の良いところです。

水2の博物館展示論は学芸員資格認定科目です。Aセメスターで開講される認定科目があまりないので、焦りつつも1コマのみになりました。このほかに、2Aで履修したメディア文化論がきっかけで情報学環教育部に入部し、5・6限に週3コマ履修していました。

Case 3: 学芸員資格取得予定／関心分野は認知神経科学、社会学

3年 夏学期

	月	火	水	木	金
1				社会学特殊講義 地域社会 (社会・植田今日子)	ギリシャ語 (共通・野津寛)
2	心理学特殊講義 知覚・認知心理学 (心理・村上郁也)	社会学演習 民族誌 (朝鮮・本田洋)		倫理学概論 (倫理・熊野純彦)	美学演習 (小田部胤久)
3	心理学演習 視覚心理学 (心理・村上郁也)	原典購読(独) 判断力批判講読 (小田部胤久)	原典購読(英) 現代美学 (三浦俊彦)	美術史学特殊講義 近代仏美術 (美術史・天野知香)	美学特殊講義 ハルヒと人間原理 (三浦俊彦)
4	芸術学概論 (渡辺裕)		ドイツ語 (共通・岡本和子)		原典購読(英) デザイン (天内大樹)
5			博物館資料論 (美術工芸品)	図書館・博物館 情報メディア論	
6			(美術史・佐藤康宏)	(教育・水谷長志)	

※水5・6「博物館資料論(美術工芸品)」、木5・6「図書館・博物館情報メディア論」はS1のみ。

【本人のコメント】

2Aで美学の必修単位を2単位しか取っていなかったため、生き急ぐようにたくさん履修しました。2Aからバランスよく履修していればこの履修数は不要です。学芸員資格認定科目はS1では水木の5・6限で履修。関心分野の認知神経科学と社会学の演習は1コマずつ入れました(月3、火2)。「美学やるには独仏羅希が必須」という迷信をガイダンスで真に受け、独(水4)、希(金1)を真面目に受けていました。

■■ 関連する他学科・学部との比較 ■■

東京大学には現在、

文学部人文学科 美学芸術学

文学部歴史文化学科 美術史学

教養学部 表象文化論(、比較文化比較文学)

という関連した学科があります。

進学する学生にとっては、「美学と美術史はなにが違うのか」「演劇を研究したいが美学と表象どちらに進むべきか」などの疑問があると思います。

ここでは、各学科の違いについて、各学科の学科紹介文を引用しながら説明します。

◆ 美学芸術学専修課程

美学芸術学専修課程は、その名が示すとおり、美や芸術に関する研究を行うところです。しかしその内容は、対象も方法もきわめて多岐にわたっています。提出される卒業論文のタイトルをちょっと眺めてみただけでも、カントやベルクソンの思想といった、美学の「王道」ともいえるテーマの研究に加えて、音楽や映画といった個別の芸術ジャンルにかかわる作家研究や作品研究、さらには、ゴジラ、妖怪、刺青、床の間といった、一見しただけでは、これが本当に美学や芸術学の卒論なのかしらとってしまうようなものにいたるまで、多彩なタイトルが並んでいます。はじめてみた人はあるいは、この研究室は単なる「好き者」の集まる同好会のようなものにすぎないと思われるかもしれません。しかしそうではありません。学問としての厳格さを守りながら、他方で、芸術のみならず、文化のアクチュアルな状況と関わる多様なテーマの共存を許容している、このわれわれの専修課程のあり方には、それなりの歴史的・思想的背景があります。

この専修課程が「思想文化学科」と呼ばれる哲学系の学科に属していることからわかるように元来、美学は美という価値について、また芸術学は芸術という人間の営みの本質について探求する哲学として展開されている学問です。ただ単に個別的な芸術作品の歴史や内容について関心をもつだけでなく、美や芸術をめぐる現象の根源にまでさかのぼってその本質や根底にある構造を解明しようとする問題意識が、この美学芸術学という学問領域を支えているのです。この学問を学ぶということは、そういう問題意識を共有するということであり、一見趣味的な対象を扱っていても、それはたとえば、ただ単に芝居の見どころを解説するとか、音楽の歴史を調べたりするというようなこととは違う視点から対象をみようとする姿勢が背後にあるのです。

(中略)

そんなわけで、われわれの専修課程ではその覗き眼鏡の性能をみがくために、古典的なテクス

トを精読し、それを厳密に研究する訓練をすることに重きを置いています。美や芸術という概念が、さしあたって西洋の文化に深く根ざした形で出てきたものであるという事実を踏まえるならば、そのためには西洋語のテキストを読むことが不可欠となります。英語に加えて少なくとももう一つは得意な言語を作っておくことが必要でしょう（ちなみに、大学院進学のための試験にも2カ国語が課せられています）。ギリシャ語やラテン語も修得するのは大変ですが、それらを修得して古代・中世から伝わる様々な文献を読みこなすようになれば、覗き眼鏡の性能が格段に上がることは間違いのないところです。

(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/guidance/bun/2009/0106bigei.html> より一部引用)

◆ 歴史文化学科 美術史学専修課程

(前略)

美術史学の何が人を引きつけるのでしょうか。高階秀爾『名画を見る眼』(岩波新書、1969年)のあとがきには、「精神的なものと物質的なものが微妙にからみ合っている」ところが芸術というものの不思議だと説かれています。美術史を考えるおもしろさは、まずここにあるでしょう。精神は目に見えません。しかし、それが物質にひとつの形を与えたとしか思えないくらい、時代によって、地域によって、作家によって、さまざまに異なる美術が作られてきました。ヨーロッパでもアジアでも、美術史は、人が世界や人間をどう認識していたかについて、その変遷のありさまを鮮やかに示してくれます。

逆にいえば、布や紙に絵具が塗ってあるに過ぎないもの、木材や石膏の塊でしかない物質が、私たちを感動させるのも、それらを形作った精神の働きを宿しているからでしょう。それを作った人々も社会もとうに滅びてしまったというのに、美術品は現代に生き続け、過去に存在した祈りや欲望、感受性や美意識について、忘れるな、思い出せ、想像せよ、と語りかけてくるのです。

つまり、政治史や経済史を研究するのと違って、美術史は物質としていま目の前にある〈過去〉から出発します。ですから、美術は好きだけれど歴史学とは何だか肌が合わない気がするという方にもけっこうなじみやすい学問だと思います。相手にする時代は古代から現代まで、地域はヨーロッパ、イスラーム、インド、中国、韓国朝鮮、日本、アメリカなどに及びますから、相当に気の多い人でも熱中できる対象を見つけるのはむずかしくないはずで、間口は狭く見えるかもしれませんが入ってみると実に広い領域だと断言できます。

(中略)

そもそも本や論文を読めばわかること以外に、体育実技や料理の実習に近い要素が、美術史の授

業にはあるんじゃないでしょうか。たとえば作品そのものや映写されたスライドに対してどう反応するかといった感覚的なことです。授業は少人数のことが多いですから、積極的に発言・質問すればそれだけ得るものが大きいと思います。美術作品を実際に見るのが重要ですから、講義や演習で首都圏の美術館・博物館に見学に行くこともあります。また、演習のひとつとして、毎年春か秋に4、5日間程度の関西見学旅行を実施しています(台湾・韓国に行ったこともあります)。見学対象は京都、奈良などの寺社や美術館・博物館にある日本・東洋の美術作品が中心ですが、関西の西洋美術のコレクションや、関西でしか観られない西洋美術特別展覧会の見学などがオプションとなることもあります。親交を深めるよい機会でもありますから、ぜひ3年生のときに参加して下さい。

(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/guidance/bun/2009/0212bishi.html> より一部引用)

◆ 教養学部表象文化論

(前略)

「表象文化論」という学問分野のめざすところを簡単に要約すれば、とりあえず以下の四点が挙げられよう。まず、「表象」というきわめて多義的な言葉が、「対象的」ではなく「関係的」な概念であることを強調しておきたい。それは哲学的には「再現＝代行」であり、演劇的には「舞台化＝演出」であり、政治的には「代表制」であって、多種多様な文化の諸次元の関係性の核を示すキー・コンセプトなのである。従ってわれわれは、芸術研究においても、そこにある「作品」を静的な対象としてただ素朴に受容し鑑賞するというのではなく、「作品」をそれが生産され消費される関係性の空間に置き直し、その空間の生成と構造を考察すべく努めてきた。「行為」の空間を問題化しようという企図が、「表象文化論」の主張の第一のものである。

第二の主張は、文学 —— 高踏的な「文芸」 —— 偏重に傾きがちだった従来型の文化研究を脱して、「イメージ」の分析を中心に据えようというものだ。ここで「イメージ」というのは、絵画から映画・テレビ・CGまで包摂するもっとも拡張された意味合いにおける映像現象のことであり、そこから必然的に、「表象文化論」にとってのもっとも豊饒な主題フィールドとして、サブ・カルチャーないしポップ・カルチャーの花開く現代的なメディア空間が前景にせり出してくることになる。

第三に、representation が「表象代表制」という政治的含意を持っているという事実に集約されている通り、広義における「文化のポリティクス」を絶えず視野に入れつつ研究に従事しよう

という要請がある。場合によってはメセナや文化政策やアート・マネージメントといった実践的な課題と取り組むことも辞さないのは言うまでもないが、それより以前にわれわれは、そもそも、文化そのものが諸力の交錯する政治的な葛藤の場であるという認識に立っているのである。

さらにまた、第四点として、こうした角度から文化現象を考察してゆくに当たって、われわれには、文学部での研究によくある文人ふうの鑑賞だの人生論的感慨だのを交えた素朴経験主義からはすっぱりと縁を切り、堅固な理論的なバックグラウンドを定立し、客観的な反証に耐える分析を行いたいという野心があった。言語学・精神分析・脱構築・ポスト構造主義・ジェンダー理論など、現代の様々な批評理論を文化研究に大胆に、かつ着実に導入し、主観的な印象批評を越えた、他者と共有可能な科学的成果を挙げることをめざしてきたのである。

新たに創設された学問領域としての「表象文化論」は、単なる一ディシプリンであるにとどまらず、既存の諸分野にゆるやかに浸入し、浸透し、それらのメイン・プログラムを内側から書き換えて、まったく新たな知の光景を現出させる批判装置として機能することを夢見ている。それはまた、実証的な手続きを踏んだ堅実な論究と、大学の枠をはみ出して現実に直接働きかける実践の力学とを共存させ、そこでの葛藤とディレンマそのものを生産的な糧としつつ、今、21世紀の「知」の空間に向かって大きくはばたこうとしている。

(<http://repre.c.u-tokyo.ac.jp/about/index.html> より一部引用)

■■よくある(?)質問集■■

Q1:華やかですか？

A1:事実として、近年の男女比はほぼ1:1です。華やかかどうかの判断は皆さんにゆだねます。

Q2:おしゃれですか？

A2:おしゃれな人はいます。独特のセンスを持つ人もいます。普通の人もあります。

Q3:小田部先生が語学魔人というのは本当ですか？

A3:本当です。ドイツ人でもないのになぜか独羅辞典を編纂している他、フランス語の原典講読を担当したり、ギリシャ語・ラテン語の文章を授業プリントで配布することもあります。プリントに掲載した文章の構文も解説していただきます。たまにイタリア語の本からすらすら引用される(もちろん英語も)など、とんでもないエピソードが山盛りです。まだ他の言語を隠している可能性もあります。日本語も通じます。主食はお菓子との噂もあります。

Q4:三浦先生はどのような先生ですか？

A4:三浦先生は、明朗な話し方が特徴で、論理学や分析的な美学を中心に講義をされています。アイドル文化やウルトラマンに関する知識が深いことや、サプリメントをこよなく愛する健康オタクとして雑誌に連載をした経歴をお持ちであること、ミミズとともに生活したご経験もあるとのことから、学問的守備範囲がとてつもなく広いことが伺えます。

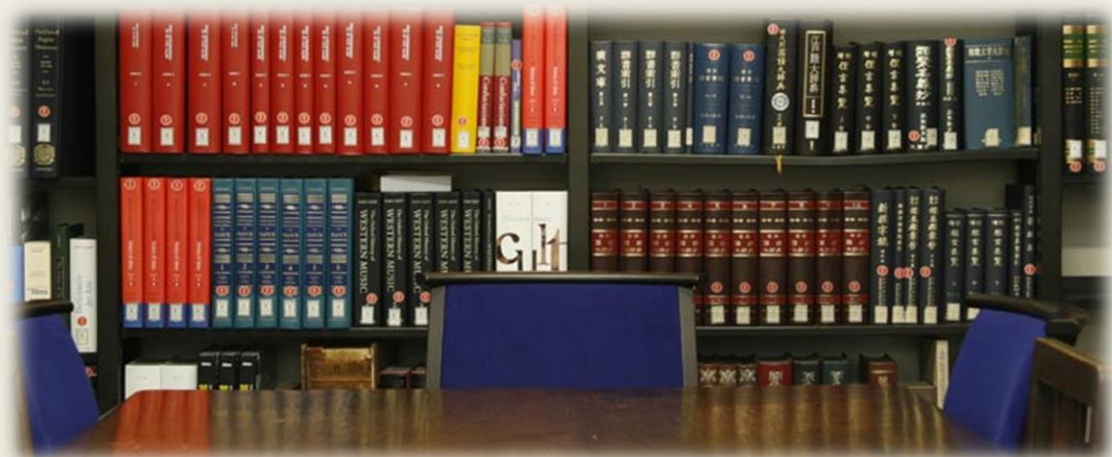
Q5:研究室にはどのような設備がありますか？

A5:授業関連であれば学部生でも自由に使える高性能コピー機があります。両面コピーや複数枚まとめたのコピーは朝飯前、ファックスにまでつながるハイテク・マシンですが、そこまで使いこなしている人は果たしているのでしょうか。もちろん、研究室所蔵の雑誌類・本も盛りだくさんです(借りる際は院生以上の研究室の人に声をかけてください)。その他、秘蔵っぽいワインやお酒、携帯用の食器など、よくわからないながらもわくわくするものが一杯置いてあります。最近の飲み会では、秘蔵の写真も発掘されました。ロマンと歴史と書物とコーヒーの香りがたよう研究室です。

Q6:研究室の略称は？

A6:「美学芸術学」では少し長いですね。学部生は「美芸」または「美学」と略します。ちなみに教授陣は「美芸」という略称を使わないようです。

※研究室には、ここには書けない秘密もたくさんあります。進学後、自らの眼で確かめてみましょう。



■ ■ 美学芸術学に関する主な著作 ■ ■

◆ 今道友信『美について』講談社現代新書、1973年

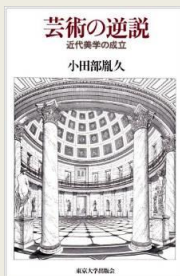
著者は、現在の美学の先生がたが学生だった頃に先生だった方です。ラテン語で授業をしたこともあるそうです。ラテン語で著した幻の著書もあり、邦訳が出版されていなくてなかなか不便、という意見も。しかし、この本はカバーの裏に美学年表が入っていて、なかなか良心的なつくりになっています。

◆ 西村清和『現代アートの哲学』産業図書、1995年

現代アートは「意味不明なもの」の代名詞のように思われがちであり、芸術ではないとして蔑まれることもあります。しかし、美学の徒たるもの、それで済ませるわけにはいきません。この本は現代アートが提示する問題、またそれを取り巻く問題をわかりやすくまとめています。

◆ 渡辺裕『聴衆の誕生』(増補版)春秋社、1996年

センター試験にも出題された名著。近代的聴衆の誕生から、複製技術の発達や商業主義の台頭などを経て「軽やかな聴衆」が誕生するというポストモダンの音楽文化のありようを渡辺節全開で描き出す。とても読みやすい本なので、音楽美学に興味のある人(もない人も)必読。



◆ 小田部胤久『芸術の逆説』東京大学出版会、2001年

いきなり読むには難解な本なので、とりあえず購入して机に飾って目標にするのが当面の使いみちになってしまいそうです。ちなみに、きちんと理解すると近代的芸術観(私たちはまだその内部にとどまっているらしいです)の意義が明らかになるそうです。

- ◆ 三浦俊彦『ラッセルのパラドクス—世界を読み換える哲学』岩波新書 新赤版(975)、2005年

20世紀分析哲学の出発点を示したと言われるラッセルの哲学の入門書として最適な一冊。小説も書かれている三浦先生は一般向けの著書も多く、他にも『心理パラドクス—錯覚から論理を学ぶ101問』二見書房、2004年なども知的好奇心をくすぐる本です。



- ◆ 竹内敏雄編『美学辞典 増補版』弘文堂、1974年

美学のバイブル的存在。しかし、現在は(学術書にはお約束の)絶版で、新品の入手は困難です。

- ◆ 佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、1995年

辞典という書名ですが、実際は読み物という感触の本です。25の概念に絞って論じられています。各概念が定義・歴史・考察の三方向から解説されており、薄くてよくまとまっていると評判の本です。



- ◆ プラトン『パイドロス』『パイドン』『饗宴』など

基本的には、どの本もソクラテスおじさんが若者に議論を吹っかけて最終的には勝つという内容なのですが、美についての書物のうちの古典中の古典です。古今東西の美学者が必ず通過してきたといっても過言ではない本です。訳は複数ありますが、岩波文庫版が入手しやすいようです。また、大抵の図書館には岩波書店のプラトン全集が置いてあるはずですよ。

- ◆ 石井洋二郎『美の思索—生きられた時空への旅』新書館、2004年

文体はきわめて詩的で、こんな風にレポートを書いたら怒られそうな感じです。しかし、自分が美しいものに接して味わった感動を白けさせてしまうことなしに学問的に扱う可能性を教えてください。美学を学んだことで美しいものに感動できなくなった、というのではなんだか本末転倒ですからね。石井先生のように心豊かに思索したいものです。

◆ 山田忠彰『エスト・エティカ 〈デザイン・ワールド〉と〈存在の美学〉』ナカニシヤ出版、2009年

少し美学の枠からはみ出る内容の本も紹介します。内容をかいつまむと、「倫理的な唯美主義」である「ネオ・エステティズモ」という概念を、過去の各種哲学者の理論を援用しながら提唱する本なのですが、美学の学際的な性格をよく反映した本で、とても面白いです。著者の山田先生は『デザインのオントロジー』と『スタイルの詩学』という2冊の本を小田部先生と共同で編集していることも特筆すべきでしょう。

◆ 吉田寛『〈音楽の国ドイツ〉の系譜学』青弓社、1・2巻は2013年、3巻は2015年

2019年度から着任された吉田先生の著書です。ウィーン古典派などのいわゆる「ドイツ音楽」がいかにかに定義され、ドイツ国民国家の形成をいかにして支えたのかを、歴史的に分析しながら、流れをもった思想史として語ることを試みた本です。西洋音楽を研究したいと考えている人にとっては必読の書と言っても過言ではありません。

終わりに

最後まで読んでいただきありがとうございました。

これで少しは美学芸術学研究室の魅力を伝えることは出来たでしょうか。

わからないこと、もっと知りたいことがあれば、どうぞ気軽にお尋ねください。

研究室の公式 Web サイト (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/>) もあわせてご覧ください。

しかし、「百聞は一見に如かず」です。

一番いいのは直接研究室に足を運んでみることです。

優しい先輩たちがいつでも歓迎します。

場所は、法文二号館(のアーケードより道路側、赤門により近い部分)の2階です。

一番迷わないルートは、総合図書館の真向かいにある地味な入り口から入って、

階段を上がって左折するルートです。

そうすれば、「美学芸術学研究室」の看板が出迎えてくれるはずです。

平日は10時頃から開いていますので、どうぞお気軽にお越しください。

2019年度美学芸術学学部生制作